釣れ釣れなるままに

２００７年思い出の釣行記 PART.　２

弁慶を従えて

鹿島釣狂

審査には、この中からアブラコ３本、ホッケ１本、カジカ１本を提出

弁慶岬右磯全景　　灯台下のこの崖を下りていける年齢ではない。中央の写真では、足が竦んで崖際まで進めず、足下の様子を写すことが出来ない。釣り場は中央先端部、入釣時は右の離れ岩との間で釣果が出る。手前の溝を狙ってソイの引き釣りを試したが・・・。釣り仲間４名が板を渡したのは右端平盤。

岩見沢釣遊会第２回大会

☆開 催 日	平成１９年５月１３日			
☆開催場所	寿都港～永豊港			
☆入釣場所	弁慶岬灯台下			
☆天　　候	小雨　西風　波１ｍ後１．５ｍ			
☆釣　　果	アブラコ	４２４	㎜	③／１１
	ホッケ	４０２	㎜	①／　２
	カジカ	３５０	㎜	①／　１
	ハチガラ	３００	㎜	２
	クロガシラ			１
	クロゾイ			１
	５匹重量	３８２	０ｇ	
☆成　　績	合計点数	１２０８	点	
	成績	２	位	
	持ち点	１	点	
	累計点	６	点（⑤①）	

体力、気力、記憶力までもが・・・

猫の額ほどの畑をスコップで掘り起こしている時に腰がギクッときた。釣り大会を控えていることもあり自嘲しなければと安静にしていたが、３泊４日で秋田、青森、函館と出張することになった。列車中心の交通機関で、長時間座りっぱなしだったのがいけなかっ

たのだろう、腰の調子がイマイチ戻らない。重い荷物を担ぐのを躊躇してしまうような具合なので、イワムシを奮発し、カツオやイカゴロ等を極力減らして対応した。

入釣場所候補は北から寿都赤灯台、弁慶岬、砂政泊、弁慶茶屋、歌島平盤、折川、軽臼、豊浜、ワスリ、床丹（　　：入釣経験有り）と考えていたが、未だ入釣経験のない歌島平盤と弁慶岬に的を絞って、仲間に最近の状況を聞いてみる。目立った釣果については定かではないが、入釣ルートは確認できた。

歌島平盤には３年前に吉井氏が向かったが、下り口が分からずに行きつ戻りつしながら時間を費やし、結局は疲れ果てて平盤の手前で釣りをすることになったということだ。赤色回転灯が回っている下り口が遠回りになるために、近道の崖を下ろうとした結果、よけいに時間をくったのである。釣果の方はまずまずだったような記憶がある。

弁慶岬へは釣遊会に入会当初から是非とも下りてみたかった所である。一度、砂政泊平盤への個人釣行の時に、弁慶岬灯台直下を空身で下ったがなかなかの難所であった。その時に盤の周囲の様子は確認できている。２回目は女房と松前、函館方面へと旅行した時で、遠回りにはなるが釣り場を見学したくて日本海側を通った。その時は、灯台からの下り口が何もつかまるところがない草原から一気に崖下になっているようで、足が竦んで下りることは出来なかった。そして、自分の加齢とともに気力の衰えを痛切に感じたものである。

女房に無様な姿をさらけ出す。

一昨年、仲間の佐々木氏が灯台下を崖下りした時にはひどく難儀したようである。昨年、それに懲りた佐々木氏は、弁慶岬手前の踏み分け道を遠回りして下り、若い仲間が灯台からの崖を下ったのだが、結果は遠回りした佐々木氏に軍配が上がったということだ。佐々木氏からその入釣ルートを詳しく確認して弁慶岬下に向かった。

タイヤ跡がついている道を進んで、暴風柵を過ぎた所に弁慶岬下に向かう踏み分け道があった。そこを進んでいくと崖のすぐ脇を人一人がやっと通れるぐらいの道が続いており、それを踏み外してしまうと崖下に転落してしまいそうで慎重に歩みを進めた。途中、濡れたぬかるみに足を取られて転倒してしまい、加齢と共に気力ばかりでなく体力の衰えさえも痛切に感じることとなった。

釣り場への行程

釣り場はこの灯台の見える尾根の陰辺りになるか？

ここからの踏み分け道を下り、崖の縁に沿って下りていく。

ぬかるみに足を取られて転倒。踏み外すと一気に崖下へと転落

平盤への下り口。その後も、いくつかの溝が崖下まで迫っていた。

崖下に辿り着くと、前方に２名の釣り人が入っている。まずはそこまでと進んだが、さらに距離がありそうで、そこにリュックを置き、竿袋だけを担いでストックを杖にして進んだ。いくつかの溝があったが膝下ぐらいで何とか意中の盤に行き着くことができた。リュックを取りに戻ったが、記憶の消え失せないうちにと崖下まで戻って帰り道を再確認する。加齢とともに記憶力まで失われてきて、帰るときになって慌てるということが度々あったのだ。何やかにやらで、午後１１時にバスから降りたのだが、竿を出すころには午前１時を回っていた。

ガンジやドンコに挑戦？

入釣時は離れ岩の手前で魚が出る

竿を出した所からさらに先で、佐々木氏が大ゾイを釣ったとされる所には２名の釣り人が入っていた。そして、私が竿を設定し終えたすぐ後に、４名の釣り人が右方向の離れ平盤に板を渡して展開した。(釣りをしていたのは始めだけで、明るくなってからは磯遊びに興じていた。タモ網を海中に入れて何かを探っている。明るくなってから岸壁を覗き込むと沢山のウニがへばりついていた。また、帰り道の潮だまりにはカキがへばりついていた)

竿３本ともイカゴロ両天秤ネット仕掛けで近投する。しばらくアタリのない時間が過ぎたが、ようやく前方にある離れ岩の手前に打ち込んでいた竿に小さなアタリが出る。初物はアブラコの３０㎝であった。離れ岩の前方に打った竿にガツガツガツと鋭いアタリが出る。途中のハエ根に入られたが強く引くと腹がはち切れんばかりにデップリとしたハチガラがあがった。メジャーを当てると３０㎝を超えており、お腹から黒い目の付いた子ハチガラがハラハラとリュックの上にこぼれ落ちた。

この湾洞から離れ岩に向かってゴロ引きでソイを狙う。ルアーマンが竿を振っていたのもここである。

クロゾイも出た。しかし、釣れるのは小物ばかりである。大ゾイを狙ってゴロの引き釣りを試みる。しかし、何度引いてもアタリは出ない。ルアーマンが奥の方からやってきて左隣で盛んに竿を振っていたが、その後、私のすぐ後の湾洞でルアーを引きはじめた。アメマスでも狙っているのかと尋ねると、「何か釣れてくれればいいのですけれどねえ」と応えてくれた。語尾の「ねえ」には沢山の意味がありそうだったが、深くは尋ねなかった。

中投に素晴らしいアタリがでたが、やはり途中のはえ根に潜られる。強引に竿を立てると抜けてきた。重量感たっぷりに手前まで来てバシャバシャと暴れるが獲物は暗くてはっきりしない。そのまま抜き上げようと闇雲に力を入れた途端に痛恨のばらし。大ゾイだったのではなかろうかとしばし呆然とする。

ゴロ引きでのソイ狙いは諦めて、遠投を中心にしてもう一度気持ちを引き締める。それに、ホッケとアブラコがダブルで食いついてきた。さらに、遠投した竿に小さなアタリが続いていたが、その内になくなってしまった。引き上げてみると４０㎝ほどのガンジである。ゴジラに似た頭は真にグロテスクだが体の方はナマズに似ていて蒲焼きにすると旨そうでもありフラシに入れてみた。しかし、どのように捌いたらよいのだろう。あの飾りを付けた頭と体のグニョグニョ感は本当に気持ちが悪い。

出張の折に寄った函館の朝市ではドンコがザルに盛られて並べられていた。いい値が付いており「鍋にしたら旨いぞ」と盛んに勧めてくれたが手が出なかった。釣りではほとほと手を焼いているが、いつかは自分で捌いてみようと思う。カジカ３５㎝ほどが近投で釣れたが、これは骨が固くて捌くのに難儀するが実に旨い。ガンジとドンコとカジカで三色鍋と洒落込もうか。

カジカの悪食に乾杯

空が明るくなってきた４時頃より、３０㎝程のアブラコが遠投でポツポツと続いた。クロガシラもきた。どこへ打ってもこの出岬を囲むようにハエ根が広がり、途中で根掛かりしてしまう。強引に竿を煽るとハリが折れたり、ハリスが切れたりしながらも、魚が付い

ている時は何とか抜けてくる。そうこうしながら、遠投で３８㎝程のアブラコや中投で４０㎝程のホッケがきて何とか様になってきた。そして、竿上げ間際に本日の頭となるアブラコ４２㎝がきた。

帰りの道程が心配になり、９時前には片付け始めた。９時２０分出発。平盤の途中で１度休憩、崖下で２度目の休憩、崖上り後に３度目の休憩。１０時にようやく国道に上がった。そして、バスが停車しやすいようにと弁慶岬の駐車場で荷を下ろした。永豊から出発したバスが弁慶岬まで来るにはまだ時間があるので、弁慶の銅像を背後にして灯台からの崖下をデジカメで撮影した。そして、眼下の険しい崖を望みながら、牛若丸のような俊敏さと弁慶のような豪腕さを兼ね備えた体力を取り戻したいと思うが、真にはかない夢物語である。

審査結果は

審査結果

優　勝	西川　紘一	１３５３点	(アブラコ460㎜+ホッケ　389㎜+5040g)	寿都赤塔
準優勝	鹿島　釣狂	１２０８点	(アブラコ424㎜+ホッケ　402㎜+3820g)	弁慶岬
３　位	吉井　　博	９９５点	(ホッケ　400㎜+アブラコ325㎜+2700g)	富　浦
４　位	佐々木秀美	９４９点	(アブラコ371㎜+ホッケ　336㎜+2420g)	大平川
５　位	嵐　　光博	９４５点	(ホッケ　362㎜+アブラコ353㎜+2300g)	富　浦

であり、西川氏が寿都赤灯台付近の磯でアブラコを爆釣してダントツで優勝した。以前、嵐氏や、宮野氏も同じように爆釣して優勝したところである。私は釣果のうちからアブラコ３、カジカ１、ホッケ１の５尾、そして、ハチガラの身長を測ってもらえるようにと６尾を出す。最初に重量を計っているところで１匹多いためにホッケを抜くかと言われたが、トゥーンでもない。これが大事な嫁である。ハチガラを抜いてもらって忘れ去られ、結局そのハチガラの身長は測ってもらえなかった。

帰宅後にカジカを捌くと、胃からホッケが丸ごと１匹出て来た（左写真）。尻尾の大きさからホッケの大きさも分かることだろう。出て来たホッケの重量を考えると６匹分である。こんなに大きな獲物を腹にしていながら私の小さなエサをくわえ込んだのだ。カジカの悪食を知るとともに、自然界の弱肉強食に自分の身も委ねているのを感じた。そして、悪食だからこそ旨いと思われるカジカ汁を味わいながら海の芳醇さにも乾杯した。しかし、ガンジにはやはり手を出すことが出来なかった。